

福島への想い、届け！

竹縄さんの歌集『東の光』

第二集ができました。

以前、まほろば自然農園をお手伝い頂いていたこともある、竹縄さん。二〇〇一に自費出版された『東の光』、その第二集をこのたび出版され、まほろばで販売させて頂くことになりました。

今回、売り上げは「十万年プロジェクト」を通じて福島の子供たちの保養のために寄付されるそうです。（『福島』の保養の子らに夏休み」：東の光 二集・120頁）また、一〇〇部を福島県教育委員会を通じて地元の高校生たちへ、と直接寄付されました。

竹縄さんは、「私はずっと野の道を歩いてきた」とおっしゃいます。それは、花鳥諷詠を読む俳句の常道と決別し、日々の生活から生まれるイノチへの想いの徒然を、ありのままに表現するという、誰も通ったことのない道なのだそうです。それは、竹縄さんの生きざまであり、生命賛歌でもあり、平和な未来への希望そのものなのだと感じました。

札幌での店舗での販売はご縁の深いまほろばだけで、とのこと。ぜひ皆さま、お手に取ってその思いに心を寄せていただけましたら幸いです。

（編集部 島田 浩）



東の光

二集を書き終えて

竹縄 律子

『東の光 二集』をまとめ、あとがきの句が出た段階で町内の新年会に出席した。久しく酒を断ち、出会った限定酒一本「酔楽天三十三番」。あまりにもおいしく三杯も……。それでも誰かに吞ませたい気持ちになり、販売元をメモし電話した。札幌で今、限定三十一番三十二番二本だけあるという。その時ひらめいた。三十一番三十一文字……萬葉集の所持に。三十番は私の師、安藤美紀夫に。国の行末を案じつつ逝った人に贈るお酒として即注文した。俳句の革新は萬葉集に結ぶこと。夫が突然亡くなり改めて三百年の法名をたどっていた時、新年のまほろば日より長くお勤めの伊藤さんの「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいや重け吉事」という萬葉集末尾の歌とシンクロしたことに始まる。夫と私の実家は同じ真言宗で、今年、私の祖父の百六回忌にあたる。明け方「革新の一月 ステンレス光る」が生まれた。冬の寒い間家中をかたづけ、残すものは大切に調理台をピカピカにしたあとだった。俳句が単に花蝶風詠でなく、時代を変えて行くものとして蘇る。世界に不動の位置を定着させることができる。光と熱と音が揃った。詩も川柳も一行詩も文も共に。

日は高く地下に二本の「酔楽天」
節分や 家持・美紀夫に「酔楽天」
空海に目見ゆる一書日は高く
種子島の「開根」届く雪祭
左利き揃う二月の句座の位置
血も息もツイッターめく春浅し
天地の新しき価値太陽柱
開拓の家系図に手を日脚伸ぶ
マスク減りすべり止め濃き道にバス
除雪費の記録の北都寒もどり
御自愛と旧師の葉書神の旅
次世代に伝へることばあたたかく



『東の光 二集』 竹縄律子著 定価：1,000 円（税込）

※売り上げは福島の子供たちの基金として使用させて頂きます。